

篠ノ井遺跡群出土の銅釧

田中正治郎

はじめに

長野市篠ノ井遺跡群は弥生時代から古墳時代を代表する大規模遺跡として著名であり、長野市教育委員会や長野県埋蔵文化財センター等により発掘調査が繰り返されている。平成5～7年度に行われた北陸新幹線建設にともなう調査でも弥生後期から中世に至る多数の遺構・遺物が検出された。なかでも50数基にのぼる円形周溝墓群の発見は県内では他に類を見ないのであり、該期の墓制研究に重要資料を提供することとなった。報告書は昨年刊行されているが、都合により掲載できなかった資料のうち、円形周溝墓 SM213出土の銅釧が報告可能となったため、遅ればせながら今回誌面をかりて紹介しておきたい。

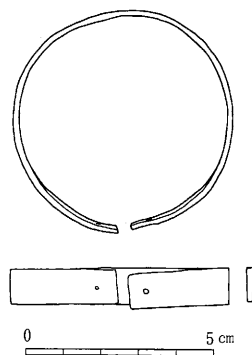
北陸新幹線地点 円形周溝墓 SM213出土の銅釧

SM213は篠ノ井遺跡群北陸新幹線地点内でも千曲川寄りの1A区に位置し、多数の円形周溝墓が密集したなかに存在する。周囲にはSM211、212、214、215等がSM213を取り囲むように存在し、本周溝墓はこれらの周溝墓と周溝を一部共有あるいは接触した状況を呈している。特にSM214は本周溝墓と最も近接しており、本周溝墓の主体部はSM214の周溝の一部を埋めて構築されている。このためSM213とSM214は新旧関係が明確であるが、本遺跡の円形周溝墓は基本的に切り合わないためSM213とSM214の追葬と報告者はとらえている。

今回報告する銅釧（巻頭写真1・第1図）は幅13mm・厚さ1.5mmほどの帯状の青銅を円環にしたもので、直径は5cm前後である。合わせの部分には緊縛用と思われる小孔が一对観察される。この孔は外側よりも内側がやや大きくなっており、この方向から穿孔されたものと推定される。この銅釧は主体部から検出され、調査時の所見によれば被葬者の右腕に装着されていたとされるが、人骨の保存状態は芳しくなく明確な埋葬状況は明らかでない。

本遺跡ではこの他に銅釧が3点出土しているが、いずれも住居跡からの出土であり、合わせの部分には小孔は見られず、SM213のものとは異なっている。

今回は紙数の都合もあり類例の検討などはできなかったが、銅釧は長野県内でもそれほど出土例は多くない。今後、資料の収集に努め再度考察したいと考えている。



第1図 篠ノ井遺跡群 SM213 出土の釧